八雲會報

2021年(令和３年)
6月30日

発行：東京都立大学
附属高等学校同窓会
〒152-0023
東京都目黒区八雲 1-1-2
桜修館中等教育学校内
編集：同窓会報編集委員会

定期総会は延期します

本来なら今年は、３年ごとの同窓会定期総会を開催する年です。新型コロナの蔓延が無ければ、例年通り10月に桜修館校内の多目的ホールで総会を開催し、その後参加者による懇親会を行う予定でした。

しかし、感染状況が夏以降一気に好転するとは考えにくく、多人数での会議、会食は避けるべきだとの考えから、理事・評議員によるメール審議により、当面1年間の延期を決定しました。

会則には、通常総会を延期する規定はありませんが、現在は想定外の緊急事態であり、ご理解をいただければと思います。

3年間の活動報告

理事長　宍戸迪武・13期

前回の同窓会総会から3年経ちましたので、この間の同窓会活動について、ご報告します。3年間の報告をきちんとしたいところですが、私たちの同窓会も新型コロナの直撃を受け、2020年度はほぼ活動停止状態となってしまいました。したがって報告の中身は実質2年間という事になりました。

「八雲が丘賞」

2013年にスタートした「八雲が丘賞」は2019年に第7回を数えました。

第1回の日本文化部に始まり、フィールドワーク部、写真部、美術部、科学部(旧生物部)と続き、2018年は創作部が受賞。2019年に初めて運動部の前期サッカー部と前期女子バスケットボール部の受賞となりました。

桜修館の現役生徒に都大附高同窓会から贈られるこの賞は、都大附高と桜修館を結ぶ絆のひとつであり、桜修館の今を知る大事なカギでもあります。残念ながら2020年は、コロナの影響で授賞無しとなりましたが、今年はぜひ受賞者を出したいと思います。

八雲が丘ホームカミングデー

八雲が丘ホームカミングデーは、2019年に通常の「第5回」と、1期から14期を対象とする「第2回特別版」が行われました。

卒業から50年と25年の二つの期を母校に招くこの企画は、2015年にスタートしました。開始時にすでに卒業50年を超えていた期を対象とする「特別版」2回を含め、一昨年までに7回開催されてきましたが、昨年は新型コロナの影響で開催が見送られました。

昨年対象だった20期と45期の卒業生の皆さんは、今年それぞれ次の期の皆さんと一緒にお招きする予定ですが、新型コロナの感染状況によっては今年も延期せざるを得ない可能性があります。対象の期の皆さんには、改めてハガキなどでお知らせします。

記念祭

新型コロナは、桜修館の授業、学校行事にも大きな影響を与えました。授業の3カ月間の休止、夏休みの短縮、オンライン授業の実施などの他、合唱コンクール、クラスマッチ、記念祭、海外研修、部活合宿などが中止になりました。

(次のページに続く)

＜今号の内容です＞

1　総会延期のお知らせ
　３年間の活動報告
2　桜修館・石崎新校長先生からの
　着任ご挨拶
3　自由な校風が開いた扉
　６期・神崎多實子
4　四期生の文集を出版して
　４期・河尻　宏史
「ホームカミングデー」に思うこと
　19期・黒川　徹
5　生物班史「みじんこ」より
　14期・川田　秀文
6　喜多先生のこと
　５期・福原　和子
都高時代　17期・佐藤　文行
7　「同好会」から「部」へ―演劇部の思い出
　35期・片山美和子
8　「最善手」　43期・岸本　義臣
9　スポーツが社会を動かす時代の到来
　16期・三ツ谷洋子
10　「その火を燃やしつづけて
斎正子 ― 遺稿と追憶」に恋焦がれて
　26期・嶋津　和行
11　事務局インフォメーション
12　会費納入のお願い、訃報
　同窓会への連絡方法、編集後記

着任のご挨拶

都立桜修館中等教育学校長　石崎　規生

都立大学附属高等学校の皆様には、ますますご清祥のことと存じます。日頃より都立桜修館中等教育学校の教育活動にご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

私はこの4月、都立世田谷泉高等学校から本校に転任してまいりました。どうぞよろしくお願いいたします。私は中高一貫校とのご縁が深く、本校で5校目となります。都内で初めて開校した都立白鷗高等学校附属中学校の開設準備に携わったことをはじめとし、都立両国高等学校附属中学校の副校長、都立三鷹中等教育学校の開設準備と副校長を務めた後、千代田区立九段中等教育学校を含む3校の校長を経て本校に着任いたしました。都立中高一貫校が最初に開校してから15年となりますが、都民の皆様からは引き続き高い期待が寄せられており、都立中高一貫校が手を携えながらその期待に応えるとともに、本校ならではの特色と都立大学附属高等学校から永く続く伝統を活かしていければと考えております。皆様の変わらぬご理解とご支援をお願いいたします。

さて、今春の卒業生の進路状況をお知らせいたします。難関国公立大学には、東京大学3名、京都大学2名、東京工業大学3名、一橋大学2名、国公立大学医学部2名が合格しました。加えて、東京大学には既卒者1名が合格しました。難関私立大学には延150名が合格し、その内訳は、早稲田大学57名、慶應義塾大学34名、上智大学32名、東京理科大学27名となっています。既卒者を合わせると、難関私立大学への合格者は160名となります。さらに、GMARCHには、178名が合格し、既卒者と合わせると191名に上りました。

一方で、今春の本校への志願状況ですが、都立中高一貫教育校の中でも本校は高い人気が続き、6・16倍（男子5・16倍、女子7・15倍）を突破した男子77名、女子83名の計160名が入学いたしました。

今年から、思考力、判断力、表現力等に加えて、学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間力等」を重視した新たな学習指導要領が前期課程で本格的に始まります。本校でもこうした教育活動を一層充実させながら、引き続くコロナ禍においても様々な困難を乗り切っていきたいと思います。同窓会の皆様もどうぞご自愛ください。

（前のページより続く）

私たち同窓会は、毎年の記念祭に「八雲が丘の集い」という同窓会ルームを出展し、旧制府立高以来の文物、写真の展示、学生歌、寮歌、記念祭歌のDVD放映と合唱イベントなどを行ってきました。昨年の「第72回記念祭」は、戦後初めて中止となり、出展もできませんでした。

今年の記念祭は開催される予定ですが、状況によっては外部からの参加、入場が制限される可能性もあり同窓会ルームの出展は未確定です。

その他の活動

「同窓会報」の発行は、毎年行っています。印刷部数は9000部を維持、会員、特別会員（恩師）の他、桜修館教職員・PTAなどにも配布しています。

「八雲が丘学友会」は、旧制＋府立高、都大附高、桜修館の3校同窓会の連合体です。桜修館、桜修館PTAと3校同窓会の情報交換の会議を原則年4回開催。旧制以来の文物の整理・保管、学生歌・寮歌・記念祭歌の保存・継承などを行っています。2020年は会議が開催できずZoomによるミーティングを1回行いました。

「八雲が丘文庫」は、しばらく寄贈本の受付を停止していましたが、昨年10月から受付を再開しました。コロナの影響で寄贈本の整理・管理作業が滞っていますが、12面の「要領」に従って寄贈をお願いします。

同窓会の財政状況

会費を納入していただいた会員は着実に増えています。2020年度には1280人、計256万円の納入実績がありました。赤字体質からは脱出しつつあると言えます。

さらに余裕が出れば、新しい事業の展開も可能になると思います。事務局インフォメーションも併せてご覧ください。

自由な校風が開いた扉

神崎（吉村）多實子・6期

『同窓会会報』への投稿のお薦めを受けた時、わたしがフォーマルな『会報』に書くのは適任ではないのではというのが偽らぬ気持だった。

六十年余り昔の高校生活を振り返ると、一つは自由な校風を満喫したという充足感と、自由に乗じて勉強に集中するでもなく、よくぞ好き勝手にしてきたという後悔の念がないまぜになっているからである。

一九五三年一〇月に中国から帰国して間もなく、わたしは都立大附高の一年に編入学した。

父はわたしの入学に当たって、父の専門である無機化学の恩師で当時都立大学学長であった柴田先生に相談したらしい。簡単な筆記試験を受け、「化学を学ぶ目的とは」というようなテーマで作文を書いた記憶がある。何を書いたか忘れたが、戦後ずいぶん遅れて中国から帰国した者への配慮もあって編入学させていただいたのかも知れない。

期待と不安を胸に秘め通学しはじめたわたしだったが、そこで目にしたのは、廊下にべたべたと貼られた『きけ　わだつみのこえ』や『赤旗』などの新聞だった。

当時の日本はまだ中国を認めておらず、もっぱら「中共」という呼称がまかり通っており、中国からの引揚者すなわち「アカ」呼ばわりされた時代で、わたしはひしひしと風当たりの強さを肌身で感じていた。にもかかわらず学内の雰囲気は外と違って実に新鮮だった。

わたしの生まれは東京だが、「満州国」時代、父の仕事の関係で「新京」（長春）に移住し、戦後も父が「留用」されたため中国に十六年も滞在した。そして最後の四年間、中国の中学校に入って中国語漬けの日々を過ごした。ただ、家では日本語を話していたので、帰国後日本語の会話に困るようなことはなかった。

それでも帰国当初、お店の前に「饅頭」と書いた旗がひらひらしていると「マントー」と読んでは父に「マンジュウ」と訂正されたり、国語のテストで漢字にふり仮名を付ける問題で「野分」が出てきて、「ええっ？やぶん？のわけ？」などと迷いに迷い、ついぞ秋に吹き荒れる風「のわき」などという正解には至らなかった。

理解ある学友たちに囲まれて学校生活には一応馴染んだものの、わたしの関心事は、もっぱら「わだつみのこえ」など戦没学生の会の活動やロシア民謡などを歌う「歌う会」に向けられていった。

放課後、そのころ居候していた従兄の家にまっすぐ帰ることはあまりなく、わだつみ会の手伝いなどで夜遅くなることもよくあり、たまたま福岡から上京した父に従兄が「こんな放任主義の教育でいいのか」と言いつけたこともあった。

一方わたしの中国への想いは深く、中国語に飢えていた。学校の勉強よりはむしろ夜間の倉石中国語講習会（現日中学院）などに行って聴講するなど、中国語を忘れまいという気持ちが強かった。授業は老舎の『駱駝（らくだ）の祥子（しゃんず）』などの文学作品の読解が中心だった。

そんな時、友だちの姉上から「引揚者を対象にした中国語通訳の試験があるけど、受けてみたら？」と勧められた。

通訳とは何ぞや？通訳のＡＢＣすら知らないわたしだったが、渡りに船とばかりに試験を受けてみた。

一九五五年の二月ごろ、試験会場はいまの東京駅前の丸ビル近くの赤レンガの建物、多分日中貿易関連の団体事務所だったと思う。

受験者はおよそ三十人、四人の試験官は大学の中国語の先生らしかった。筆記試験はなく、与えられた『人民日報』か何かの記事を読み中国語で受け答えした記憶がある。

帰り際に事務局の方に呼び止められ「若くて有望、将来性がある。今後中国から代表団が来日した時に通訳や団員のお世話をするように」と言われた。つまり通訳試験にパスしたのだ。当時は西も東もあまり分からない未熟なわたしだったが、とにかく夢心地でその日の夜は眠れないほどの喜びようだった。

そして三月、早速第一次中国訪日貿易代表団に随行することになった。わたしはいささかも躊躇せず、しばらく授業をさぼって通訳、と言ってもサブ通訳の仕事についた。こうしてわたしの通訳人生は、高校二年生を終了しないうちに始まったことになる。

しかし今となれば後悔もある。のちにフリーの同時通訳者になってからは広い意味での常識が求められる。それは普通なら主として高校の頃に身につけるものだと思うが、勉学を怠ったせいで、医学、環境、石油化学、芸術などと毎回変わるジャンルの通訳にはまず初歩的な基礎知識から学ばなければならず、のちのち人一倍苦労した。「いま高校の教科書を勉強し直しているんだ」と、ある同時通訳仲間がなにげなく発した言葉が、わたしにとっては耳が痛い忠言のように響いた。

それにしても何も知らずに入学したわたしだったが、自由な校風のおかげで今の自分があるように思う。仮にテレビの朝ドラにあった翻訳家村岡花子が通っていた女学校などだったらとっくに失格だったかもしれない。

「好きこそものの上手なれ」で、振り返ればあの自由だった高校のおかげで始まった通訳の道を六十年余り突っ走り、八十路を越えたいまでも細々ながらＮＨＫ・ＢＳで中国中央テレビの放送通訳を続けている。

二〇二一年春

四期生の文集を出版して

河尻宏史・4期

コロナ禍の中、昨年六月、四期生の有志による文集「鳴呼西山の雲はれて―子どもの時戦争を体験した私たちから―」を出版することが出来た。

四期生は昭和二十六年四月に入学し二十九年三月に卒業した。出生は昭和十年～十一年でよく言われる昭和一桁世代との微妙な狭間の世代である。国民学校（小学校）に入学したのは昭和十七年、太平洋戦争が始まった直後の勇ましい戦果のニュースに満ちていた頃だったが、その三年後、国土は焼き尽くされ、三百万人の命を失って敗戦という結果で終わった。国民学校四年の夏休みの時である。今その時の少年少女たちが人生の第四楽章の中を生きている。

世代交代に伴い戦争体験の風化が言われ、また「歴史は忘れられる」と言う人もいる。

戦後七十五年間、昭和史の戦争体験は識者・専門家により語り尽くされていると思うが、大人ではなく子どもとして体験した太平洋戦争を語り綴れるのは、限られた私たち世代以外にはないと思う。あの戦時下と戦後の混乱期に、家族を守り子を育てた親の労苦は計り知れないが、親の庇護のもと、親の選んだ土地に住み苦難を共にせざるを得ない宿命にあった私たち。その子ども時代に体験したことを文集にして残すことは意味のあることであり、また私たちの責務と思うようになった。

同級生の三分の一が既に帰らぬ人となっているが、三年前の同期会で私がふと自分たちの戦時中の少年少女期の体験を同じ学舎で学ぶ後輩たちに文集にして残してはどうかと漏らした。出席者の大半の賛意を得ていたが、手つかずに経過した一年後の同期会で本気度を質され、それを実行する決心がついた。

世話役の方々の強いサポートがあって寄稿応募の呼びかけに何とか辿り着くことが出来た。それでも本にして出版できるほど原稿が集まるのか、内心まだ不安があった。が、呼び掛けて一と月もしない中に最初の原稿を落手、執筆するとの声も次々と届き、最終的に二十名の方々が投稿下さり嬉しく感激した。また表紙装丁デザインを同期生の清水英雄さんが引受けてくれた。

一方でこの文集に寄せる思いはあったが、防空壕に直撃弾を受け両親を亡くした余りにも悲惨な戦争体験のゆえに、今以て文章に綴ることが出来なかった級友もいた。

書かれた内容の多くは食糧難、空襲被災体験、戦火を逃れた学童疎開、外地に住んだ人々の戦後の苦難の引揚げ体験等々である。

この文集を読み、高校時代同じ教場で学び放課後の部活動を共にした親しい友であったが、これまでお互いに話さなかった話が多いことを知った。いま封印を解いたというのだろうか、老いて少年・少女時代の体験を互いに共有したいとの想いもあるのだろうか。集まった二十余編の記録が、本文集編集を発意した時の目的に叶い、残す言葉となって、次世代の方々の記憶に留まってもらえれば執筆者にとって望外の喜びである。

なお本文集は桜修館中等教育学校と八雲が丘文庫、国会図書館等に寄贈させていただいた。

「ホームカミングデー」に思うこと

黒川　徹・19期

今思えば「ホームカミングデー」という卒業五十周年を祝う同窓会の開催が夢のようです。二〇一九年の一〇月でしたから、COVID19という名のウィルスが人知れず生まれていたころです。今から百年ほど前にスペイン風邪が全世界に蔓延し、世界大恐慌が起こり、第一次世界大戦が勃発し、日本では関東大震災により大きな被害を被りました。我々は、今奇しくも、ほぼ百年の後の今日、コロナ禍、東日本大震災、リーマンショック、という形で百年に一度という大災厄に直面した訳です。願わくば、世界大戦という経験をしないことを願うばかりです。

我々19期卒業生は、現在では全く希ではない古希を迎えていますが、先ほど述べたようにクロニクルの観点で見てみますと、二十世紀五十年、二十一世紀に二十年余、生きていることになり、明らかに二十世紀の人間であります。日本の年号で見ますと、昭和に三十七年、平成に三十一年、令和に二年となり、昭和と平成とは、ほぼ同じ程度ですが、自分の気持ちの中でも、他の人々から見ても我々は明らかに、昭和の香りのする人間です。我々の父母の世代も昭和の世代の人間ではありますが、我々と比べて、戦争という大災厄を経験しており多感な時代に戦時下にあったということで、我々よりも恵まれない時を過ごしたと言えるでしょう。

（左ページに続く）

生物班史「みじんこ」より

川田　秀文・14期

みじんこ会とは生物班（生物部）部員有志の会です。当時のクラブ活動の要約を記載します。

一九六一年度

前年からの定員増の新入生（14期）は生物や化学の実験室を教室としてあてがわれ、生物班（生物部と呼ぶ部員が多かった）の活動も、拠点場所がないためもありほとんど行われていない。生物実験室を含めた新校舎は夏休みに完成した。第13回記念祭に生物班は解剖、ハツカネズミの迷路、ウニの発生の展示などを行った。内容は浅いものだったが、これらを担ったのは実質的には三年生1名、二年生2名、一年生3名であり、人数と質からすれば大したものであり、その後のクラブの活動に希望を持たせた。

また、最終日にはOBを交えたコンパがあり一年生はここでOBの存在を知り、大きな影響を受けた。

実質的活動部員が数名となっていた生物班にとって第13回記念祭はクラブ活動の前提条件や自校の誇りを認識させる切掛けを与えた。

ショウジョウバエ飼育

同年十一月下旬、都立大理学部よりショウジョウバエを数種類もらい、餌の作り方を習い、ショウジョウバエ飼育が始まった。しかし遺伝に関する知識取得と飼育法の習熟に追われ、交配実験はおぼつかない状態だった。

「高生連」の結成

高等学校生物部連合の具体化が中心課題として取り上げられた。高生連結成に前のめりになった理由の第一は当初3校（附高、駒場、トキワ松）がショウジョウバエ飼育という共通のテーマを持ち、餌の作り方、飼育方法を教えあうという面からも順調にいっていたこと。第二に附高の物理化学部が既に東京都化学部連合に加入し、多摩川の水質検査という共同課題で成果を上げていたことに刺激された。第三に部員が記念祭後、生物部活動への意欲と直面した沈滞感危機感を克服しようとする意欲が何らかのはけ口を求めていたことである。

当初3校という小規模なものから構想が膨らみ、最盛期には23校が規約制定会議に出席し、最終的には附高を含め12校が参加する組織になったが、春休みに入り、行事や共同作業はほとんど実行されぬまましぼんでいった。

評価

こうして高生連は霧散したのだった。だが、教師やOBの指導を全く受けず、部員のみで構想と組織つくりに及んだことは、各生物部員の自信を深め、その意識に大きな影響を及ぼしたと思える。

「戦争を知らない子供達」である我々は、昭和の中でも、戦後の経済成長を背景に、常に右肩上がりの暮らし、食生活、住生活など次々に新しい商品と出会い、文化的にも色々な恩恵を受けて育ってきたと言えます。こうして考えますと、二十世紀の後半、昭和の後半という時期は恵まれた時代であったと言えるでしょう。それに比して、二十一世紀、平成・令和というのは、不安・混迷の時代でありましょう。我々の子孫の事を想うと心配になります。これから彼らを待ち受けているのは、常にウィルスが傍らにいる不安、大地震への恐れ、失業、経済への不安、先送り続けられる負債から生ずる社会福祉への不満等、大変に重い荷物を背負って生きていかなければならないでしょう。平成の、又、二十一世紀初頭の最大の変化は、スマホの登場だと言われます。路上でも、車内でも、家庭内でも、コロナと同じ様に常に隣にいます。ある意味ではこの道具がこれからの大災厄の源かも知れません。

我々も人生百年と言われていますので、この世界に生きていかねばならないのですが、人生の主役でない我々の世代は、それほどひどい目にあうことも無いでしょう。

今年「ホームカミングデー」が開催されるかどうか定かではありませんが、後輩諸氏、ぜひ参加されることを、お勧めします。私達のクラスも六十歳を過ぎて何度かクラス会を開催して参りましたが、それとは違った喜びを、そこに見出すことができました。幹事を拝命した為、事前準備で、卒業名簿・写真・記念祭のパンフレット、同窓会報などを読み、幹事打ち合わせという名目の数度の飲み会を重ねるにつれ、素晴らしい先生方に教えて頂き、素晴らしい学校に居たのだなという感情が沸いてきました。齢を重ねると過去の事を美化しがちだと言いますが、楽しかったので戻ってみたいという事ではなく、素晴らしい環境に居たのに、その事を生かしきれずに高校時代を過ごしてしまったという自責の念を強く感じる様になりました。「自由と自治」という旗頭のもと、むろん私は、その意味を深く考えたことも実践したこともありませんでしたが、先生達や一部の生徒達は実践されていた様でした。この当時は、団塊の世代が我々の上に存在し、一浪するのが当たり前で「ひとなみ」と読むと言われ、東京大学や現・筑波大学の受験が中止となり、受験地獄と称されていました。私の大学の同級生は、某有名受験高校の出身者ですが、死んでもあの時代には戻りたくないと言っています。現状の生活に不満・不足はなく、人並みの幸せ、不幸せを経てきた人生ですが、都立大附属高校の時代に戻れたらと思います。その場所には、その時代に流れていた自由闊達な空気がありました。テレビ・映画・音楽・出版などの分野も、一部ゆき過ぎの部分もあったにせよ、自由な表現が見られました。現在は、ネットでの無責任な正義風、正論が横行し、これらのものは目にしないようにしています。

喜多迅鷹先生のこと

福原（広瀬）和子・5期

私は高校一年生のとき喜多先生に「一般社会」を習ったが、それ以外の交流はなかった。卒業後六十年ほどたって私の最初の著書（「目ざめゆく心～戦中戦後の少女時代～」）が出版されたので、高校の恩師で唯一御存命だった喜多先生に献本したら、細かな指摘や感想を書いたお手紙を頂戴した。挿絵についても一家言持っておられ、担当した林明江さん（クラスメート、旧姓相良）への助言もあった。また、先生の著書リストが同封されていて、そのなかで希望の本があったらどれでも送ってあげるとのことだった。私は先生の著作の多くが図書館に収められているのを知っていたので、「図書館から借りて読みます」と辞退すると、先生デザインの人物スケッチ入りのカレンダーを送ってくださった。その中のアコーデオン弾きの絵からは、謝恩会で先生が歌ってくださった「セッシボン」が聞こえてくるような気がした。

先生は一九七一年に都立大附属高校を辞め、画業を志された。学園紛争が契機になっているとのことだが、私はその頃三人の幼児を連れてアメリカに行っていたから当時の事情は知らない。「社会科」を教える先生が画業へ転身とは普通なら挫折と思われる出来事だったが、その後の先生の活躍は素晴らしかった。一九七八年から一九九四年まで毎年「紀行スケッチ展」を開き、一九九九年から二〇〇四年まで毎年「東京を描く画家たち展」に出品した。それらの作品の大部分は歴史や文学好きの先生の解説付きの大型本として出版された（日貿出版社など）。スケッチで訪れた先は、東京や長崎など日本だけではなく、ヨーロッパやモロッコ、中国などに足をのばされた。近年の再開発で町の景観が変わっていくなかで、古い建物や町並みを愛された先生は大車輪でスケッチを仕上げて後世に残されようとされたのだろう。

一九八〇年から一九八九年まで毎年先生は単身で東欧諸国を訪れ、その土地の電車やバスで移動してスケッチして回った。言葉もわからない異国で苦労すればするほど、先生の絵を描く意欲は強く突き動かされた。当時、東欧諸国は社会主義国圏と呼ばれていたが、互いに利害が対立しており、経済の窮乏化が進んでいた。このスケッチ旅行の記録が、「東欧・激動の底流はここに」（読売新聞社刊）にまとめられている。そこには、先生が旺盛な好奇心を抱いて地元の人々とふれあう様子がユーモアをまじえて語られている。この本を読んだ私の感想を手紙でお知らせしたとき、先生は体調を害して入院されていた。それなのに、先生は面会謝絶の病室から心のこもったお便りをくださった。それから程なく先生は亡くなられた（二〇一五年九月一二日没）。

都高時代

佐藤文行・17期

孤独に過ごした中学生は高校でいきなり社会に出くわした。始業式直後の民青乱入だった。連中が大人に見えた。日本史では教師が家永三郎の教科書を片手に「これは汚れてしまった教科書です」と紹介。現在係争中であり自分も出廷予定だという。東大出の英語教師は発音が得意で、語尾のｅｒを味わいながら強調した。彼女の米国短期留学時にはひとり羽田空港まで見送ったが、帰国時にケネディコインをいただいた。（今でも机の引き出しの中にいる）数学参考書の著者先生は厳しい方だったが、生物の斎先生は旧制時代からの生き字引でオンチの顧問もされていた。ぼくは声に少し自信があったのでオンチに拉致された。

人間としてのぼくの根幹は都立の三年間で形成された。文学に出会い音楽におぼれながら、吉本隆明や岩波新書や文庫を読み漁り、唐十郎の「腰巻お仙」を楽しんだ。都高では夏休み前に教官推薦図書集が配られる。ぼくは三十八冊読んだ。

しかし必修だった数学や物理学の重要性が理解できず、次第にさぼるようになった。昼間は不登校で楽譜のガリ版切りをし、下校時刻に登校してガリ版印刷をすることもあった。なぜか全く恥じることがなかった。

わが校には学生歌がある。記念祭のファイヤーを囲み男女入り乱れ狂ったように叫び歌うときが最高だった。学生歌は明治時代の壮士節が起源。座って手を叩きながら「妻を娶らばオたけて」と歌うやつだ。高校生は太鼓を囲んで咆哮する。

しかしいま桜修館ではファイヤーをしないそうだ。人はたまには正気を失う寸前まで狂うことも必要だ。どんなよい子でも不燃ガスは溜まるもの。桜修館の学生たちはどこでどうやって心の帳尻を合わせているのだろうか？

高校時代狂おしいほどの恋情はいつも解決法を見いだせずに焦げ付いたが、五十数年ぶりに偶然出会った元美少女の顔は、人生のストレスを深く刻み込んでいた。他人ごとではない。痩せてたるんだ腹の皮膚をつかみながら、夏休みの人気ない都高グラウンドでひとり、体育館の壁とキャッチボールをする自分の姿を思い出す。高校もひとりだったが、続く3年間の浪人生活は究極の無所属だった。

「同好会」から「部」へ　～演劇部の思い出

片山（市村）美和子・35期

四十余年前。私が入学したとき、都立大学附属高校の演劇部はできたばかりの「同好会」でした。「部」に昇格しなければ予算がつかず部室、照明、衣装、大道具、小道具もない。あったのは先輩方の「演劇をやりたい」「同好会から部に昇格させたい」という情熱でした。

照明は懐中電灯

カリスマ性のあった初代の先輩方、フレンドリーだったすぐ上の先輩方、多才でビジュアルに秀でた同期たち。記念祭公演はCホールという都立大学（当時はまだ敷地内にありました）の施設でした。部員を獲得し実績をあげるため、記念祭公演だけでなく一学期に一回は視聴覚室公演をやりました。照明は主に蛍光灯。前後左右のスイッチを消灯して観客側を消灯し、暗転・場面転換の工夫をしました。スポット照明には大きな懐中電灯を使いました。衣装は器用な部員が作ったり普段着に手を加えたり。小道具は友達や部員の出身中学の演劇部から借りました。部室がないため視聴覚室準備室の片隅に置いた衣装が紛失の憂き目にあったこともありました。

発声練習などは独学でした。最近はインターネットで簡単に台本探しができるようですが、そんな便利な仕組みのない昭和時代。出版されている台本を上演時間に合わせてカットして使いました。劇中音楽は今よりずっと入手が困難でした。ネット検索はもちろんレンタルショップもまだ少なくて、音楽や映画の確かな知識とレコードを買う経済力が必要でした。楽器店でキーボードをいじり、楽譜を立ち読みして劇中歌を覚えたのもいい思い出です。

存続の危機を越えて

演劇部は運営が難しい部活動です。演劇を志す人間は数が少ないうえに自意識やこだわりの強い個性派が多い。にもかかわらず、ひとつの舞台を作り上げるのは共同作業でチームワークが求められます。カリスマ性のあった初代の先輩方、フレンドリーだったすぐ上の代の先輩方、多才でビジュアルに富んだ同期たち。私が入部してからの二年間は分裂・存続の危機の連続でした。二年生の時、記念祭を前に新入部員が入らず退部者が続出し、現役の同好会員はたった二人になってしまいました。窮状を救ってくれたのは新たな同期。戻ってくれた人もいて、公演ごとに絆を結び直し、翌年、パワフルで才能あふれる一年生たちを迎えることができました。

三年生の六月の生徒総会で、演劇同好会は「演劇部」に昇格しました。卒業アルバムには、「祝！部昇格」の文字をバックに三年生と一年生が一緒に写っています。入部してくれた一年生への、私たち三年生の感謝と希望が込められた一枚です。

初めての部費で購入したのは、視聴覚室公演で使うスタンド照明器具と舞台メイクセットでした。現在、私の娘は某都立高校の演劇部員。たくさんの照明器具と衣装に恵まれた演劇部ですが、今の高校演劇はあまり舞台化粧をしないそうで、メイク道具だけは私たちの方が立派です。心残りは高校演劇大会に参加するところまではいかなかったこと。娘が当時の舞台のビデオを観て、「地区予選突破まちがいなし」と太鼓判をおしてくれました。それだけの力があったのにと残念でなりません。

夕鶴の一場面

三年間で演じた作品は、『十一ぴきのネコ』（井上ひさし）、『こわれがめ』（クライスト）、『ハムレット』（シェイクスピア）など。シェイクスピアをアレンジした創作劇や修学旅行の新幹線のなかで雑談から生まれた合作劇、セリフのないパントマイム劇に挑戦したこともありました。なかでも二人で企画がスタートし、主役のつうを演じさせていただいた『夕鶴』（木下順二）は、与ひょう役Iさんの素晴らしい演技とともに私の心に深く刻まれています。

コロナ禍で娘の演劇部も様々な制約を受けながら部活動を続けています。高校生が思い切り部活に打ち込める日が来ることを願ってやみません。されどコロナ禍がなくても波瀾万丈なのが演劇部です。今は四十年前に比べて表現手段も発信方法もたくさんあります。表現活動を主とする部活の灯が絶えないよう頑張ってほしいという思いで書きました。

さらにこの場を借りまして、八雲が丘で演劇活動をともにしてくださった先輩方、同期の皆さん、後輩の皆さんに心からの感謝の気持ちを捧げます。

「最善手」

岸本義臣・43期

「最善手」という言葉が好きだ。もちろん将棋のような完全情報ゲームと違って、大抵の森羅万象は不完全情報の状態で目の前に現れる。神ならぬ我々はその時点で得ることのできた情報を総合して「最善手」と思われる一手を選択して決断するしかない。しかし、たとえ思わしい結果が出なくても、その決断を後日振り返って、少なくともあの時点では最善手、もしくは最善手に限りなく近かったと思うことができれば少しは救われるではないか。

そういう性格のため、何かを始めるに当たってまず行うことは情報収集だ。最善手に近い判断はより多く、より質の高い情報から生まれるからだ。自然と判断速度はやや遅めになるが、それは個人差レベルのものであり速度自体が最善となる場合に後れを取らなければ特に問題ないと思っている。家族だけで食べるステーキを焼く前にプロの料理人のブログで焼き方をチェックするのと同様に、母校の同窓会報に随想を書くことになった今回、当時の思い出に想いを馳せるより先に、母校をウィキペディアで検索したり、同窓会のホームページをチェックしたりすることは私にとってごく自然のことだ。

ついでに改めて「最善手」を検索し、ずっと将棋用語であり囲碁では定石とか最強、最良の手と言うのだと思っていたが、どうやら囲碁でも普通に最善手は使うらしいことを知った。全く、情報収集には終わりはないものだ。

そして、検索の結果、「東京都立大学附属高等学校同窓会」のホームページには、サイトメニューの一項目を割いて、「校歌・学生歌・寮歌」が紹介されていることを知ったのである。

43期生である私の目線からではあるが、学生歌や寮歌が何かということについては、ある程度の諸先輩方には説明するまでもないものであり、我々世代以降の卒業生や現役生には説明してもよく分かってもらえないもの、という認識を持っている。私自身はどうかというと、学生歌の「青春といふ」は歌える。一昨年はまだ新型コロナという言葉は影も形もなく、ホームカミングデーも開催されたので、傍観している同期生をよそに18期生の方々と歌わせていただくことができた。伝統に則り口伝で教わっていたので、音程は所々思っていたものと違ったが、歌を知っているというのは楽しいものだと改めて思った。

結局名前が元に戻った東京都立大学の応援歌になっているだけあり、奮い立つというか、今でいう「アガる」歌だ。校歌も珍しい4分の3拍子で学生時代から好きだったが、この歌も1番から3番までメロディが違っていて面白い。同窓会のホームページには歌詞や演奏時の動画が掲載されているので、興味ある方はぜひご覧いただきたい。

では、なぜ私が学生歌を歌えたのか、という話だが、単純に当時音楽智識研究会（通称音智。要は合唱部だが伝統あるこの名前は大事にするよう先輩諸氏に言われた記憶がある。ただ、いつからの伝統なのかは判然としなかった。ちなみに、現在は普通に合唱同好会というらしい）に所属していたからであり、音智の部員は代々日本寮歌祭に参加していたからだ。日本寮歌祭についてもわからない方が多いと思うが、こちらもウィキペディアにはちゃんと項目があるので検索していただくとして、私としては日比谷公会堂で歌った後、夜の官公庁街に繰り出し大通りで太鼓を打ち鳴らし歌い散らすという、なかなかにファンタスティックな体験ができる祭だったという認識である。「青春といふ」だけでなく「古きいらか」や「吹きすさぶ」「晩夏に集う」なども教わったし、今でも歌える。前述のとおり音程は口伝なので怪しいところが多いが。

日本寮歌祭自体は平成22年に一度その歴史に幕を下ろしたものの、一昨年に復活開催したらしい。同窓会のホームページもそうだが、数十年前の学生のごく一部しか知らない歌たちを、なぜ諸先輩方はここまでして残そうとしているのか。失礼ながら、現役生時代はそのお気持ちの一端を汲むこともできず、教わった歌やそこに詰まった何かを知ろうともせず、後輩に伝える努力もしなかった。

私自身若かったので、今のこの性格をベースに、さらに物事の「最善手」を打ち続けたいと本気で考えていた。例えば絶滅危惧種問題などは、絶滅することによって人間の生活に影響がないものを、ただ数が少ないからといって保護するのは「最善手」ではないと考えていた。

寮歌も、当時流行していた歌と同じように、残る理由がある歌なら自然と残るし、そこに自分の意思を介在させることが「最善手」とは考えられなかった。自分が好きと感じるものと、残ったり伝わったりしていくものは当然一致しないものだから、残すべき努力というものに理由を見出せなかった。

今は、この残す、伝えるということに関しては全く考え方が変わっている。理由はいくつかあるが、一つは、40代になって娘を持ったからだ。現在一歳八カ月であり、良く可愛い盛りと言われるが産まれてからというものずっと可愛い盛りである。

そして、愛する娘に何を伝えれば人生がより楽しく豊かになるかをいろいろと考えはするものの、それを受け取ってくれて、何かが残るかどうかはまったく子供次第なのだ。こちらには何の選択権もない。部下や後輩に仕事を教える場合は、何が残るかまでこちらの責任であることと比べると正反対である。

人生が受け取るターンから伝えるターンに変わると、「残すべきもの」とは結局のところ「残したいもの」で

（左ページに続く）

スポーツが社会を動かす時代の到来

三ッ谷洋子・16期

私は一九六三年に都立大学附属高校に入学しました。旧制高校の校風が色濃く残っており、制服もない自由な雰囲気が気に入りました。残念な思い出もあります。2年生の時に開催された東京オリンピックの聖火ランナーを選出するため、希望者を募った時のことです。テニス部だったため走力に自信があったのですが、目黒区在住の規定があったため渋谷区在住の私は対象外でした。

しかし、何よりその後の人生に大きな影響を与えたのは、自分自身の考えを主張する姿勢の大切さです。周りの友達は、大学生や社会人に交じって『日韓条約反対』などの集会やデモに参加していました。ある時、私も誘われて千駄ヶ谷駅に行ったのですが、そこで気づいたのは、自分が政治の事を何も知らないという事実です。そして自分なりに出した結論は、一時的な運動より体制内改革にこそ意味があるということでした。

それを突き詰めるために大学では政治学を学ぶことにしました。慶大に入学したものの、クラスは語学の授業のためだけに作られた便宜的なものでした。高校からの流れでテニスの同好会に入ったのですがお楽しみムードが強く、体育会の硬式庭球部に鞍替えしました。それからはテニス中心の大学生活でした。

男女差別を初めて実感したのは就職活動の時です。企業の募集は男子がほとんど。マスコミ志望の私は男子学生を再募集していた産経新聞社に掛け合い、紅一点で受験して入社することができました。配属されたスポーツ新聞では様々なスポーツの現場に足を運び充実した日々でした。個人的には結婚・出産で退社を余儀なくされ、その後、離婚。フリーランスで書きまくっても収入は限られました。誰も取り上げないテーマを求めて、2年後の一九八〇年にモスクワオリンピックを控えていた『スポーツ大国・ソ連』に取材に出かけました。

当時のソ連は広大でした。モスクワ、レニングラード（現サンクトペテルブルグ）の他、タリン（当時・ソ連エストニア共和国）、キエフ（当時・ソ連ウクライナ共和国）の会場予定地を見て回りました。この橋渡しをしてくれたのが高校時代の友人でした。

1978年「ソビエツキー・スポルト」紙

思い返してみると一九七〇年に大学を卒業した後、10年ごとに転機が訪れました。一九八〇年はモスクワオリンピック。さらに10年後の一九九〇年は、通産省（当時）がスポーツを初めて産業として取りあげ、私は会議の委員として参画しました。この仕事でスポーツ政策を学びスポーツ関連業界の人脈を作りました。この経験がスポーツビジネスコンサルタントとしての基盤をさらに広げました。

同じ頃にJリーグ（日本プロサッカーリーグ）設立の動きが始まりました。「サッカーは知らないけれどビジネスで役立ちそうだ」と評価され、Jリーグの理事に起用され17年ほど務めました。西ドイツ（当時）のような地域密着型サッカークラブを全国に作る青写真を描いていました。しかし、私から見るとビジネスの視点が不充分でした。そこで企画・実施したのが「トップマネジメントセミナー」でした。大相撲やプロ野球について学んだ後、アメリカ視察から戻ったのはJリーグ開幕の3カ月前。その後のクラブ視察ツアーでは、各国のサッカーだけでなく文化や歴史に触れる機会にもなりました。

こうした仕事をしながら折に触れて感じたのは、欧米に比べて日本では女性への配慮をしない男性中心の社会だということでした。心技体を競うスポーツの世界では女性の視点が不可欠です。その意味で設立したのがWSFジャパン（女性スポーツ財団日本支部）です。今年40年を迎えました。7月から東京で開催予定のオリンピック・パラリンピックはほとんどの種目に男女のカテゴリーを設けているようですが、それが本当の男女平等といえるのかどうか。スポーツの世界は多様化し進化しながら社会をも牽引する時代を迎えています。

2000年 日本プロスポーツ大賞功労賞受賞

構わないということに気付く。なので諸先輩方は様々なものを残すことにたくさんの努力をされている。そのエネルギーは自分が好きなもの、というだけで充分であったのだ。

次世代はその中から我々がしたように、次々と取捨選択をして進んでいく。その選択の幅は、多いことが自由であり、豊かでもある。現在猛威を振るっている新型コロナだが、仕組みは螺旋一つのRNAであり、伝え間違いを治す術がなく変異を繰り返す。人間は二重螺旋のDNAを持っているから、少々間違いがあっても微調整して情報を伝える力がある。ならば伝えたいものを伝えていくとしよう。とは言え、今の娘に寮歌はちょっと「最善手」とは思えないのでしばらくはEテレの歌を聴いてもらう日々が続きそうだ。

八雲が丘文庫
「その火を燃やしつづけて 斎正子―遺稿と追憶」に恋焦がれて

嶋津和行・26期

同窓会のお手伝いをするようになって、五年ほどたつ。同窓会の会合で歳の離れた諸先輩のお話を聞いていて、お話に出てくる恩師の名前の中に私が判る方が何人かいらっしゃるが、その中の筆頭が斎正子先生だ。斎先生の都立大附属高校の着任は、なんと前身の旧制府立高校時代の昭和十八年（一九四三年）、生物を教える助教授として赴任された。それ以降、昭和六十年（一九八五年）までの42年間、都立大附属高校の教諭を勤められた。1期生から38期生までの卒業生が斎先生の薫陶を受けたことになる。退職時には、毎日新聞（一九八五年三月一六日）が「教壇半世紀 去る八千人」と大きな見出しに、教え子たちに囲まれる斎先生の写真と共に7段に渡る記事で斎先生の最後の授業の様子を伝えている。この年、公務員の60歳定年が施行されて一斉に先生方が退職された。

私は、昭和四八年（一九七三）年に都立大附属高校に入学し、鉄筋コンクリートの校舎から一段下がった南校舎（木造校舎）にホームルームのクラスがあった最後の学年であった。校舎の二階に二クラスが入り、一番奥が生物室、私は手前の1Dのクラスに所属した。在学中の斎先生との思い出は正直なところ少ない。私が生物を苦手にしていたからかもしれない。少ない中から引き出すと、一年時に生物を受講し、入学して間もない梅雨の時期に逗子海岸に生物実習に行ったこと、夏休みの課題で生物に関する本を読み感想文を提出したことである。私は課題に「植物の生」（沼田真著）岩波新書（青版）を選んだ。今となっては内容をまったく忘れてしまったが、斎先生は、とても面白い本を選択した生徒がいた。その内容をみんなの前で紹介して欲しいと、本の内容をかいつまんで説明された。斎先生の話を聞いていると、まさしく私が読んだ「植物の生」だった。本の内容を説明するのに余程自信がなかったのか、目立ちたがり屋の私には珍しく、じっと俯いてやり過ごした。

卒業して10年、同窓会名簿の更新に当たって、故野口貞義（4期）さんから召集が掛かった。母校の一教室に集められ、同窓会名簿の改訂作業を行った。その時、同窓会役員という認識がなかった私は、野口さんに「なぜ、私が」と問いかけた。野口さんの回答は明快だった。「同窓会の評議員を出していないクラスは、斎先生に頼んで推薦して貰ったんだ」

斎先生が推薦されたのかと、それらなら仕方がないなと納得したのを今でも覚えている。

同窓会が桜修館と一緒に手掛けている事業に「八雲が丘文庫」がある。その中に気になる一冊「その火を燃やしつづけて 斎正子―遺稿と追憶」（斎正子先生遺稿集刊行委員会、一九八七年）がある。退職して間もない一九八六年一〇月に死去された斎先生を偲んで、教え子たちが一九八七年一〇月に出版したものだ。国会図書館に所蔵されているのは知っている。でも、自分の手の物にしたいと、時折ネット上で検索して捜した。長らく空振りに終わったけれど、二〇一九年三月に楽天に出品されているのを見つけた。狂喜乱舞、早速、注文したが、「在庫管理のミスで売り切れです」と、出品者によって注文をキャンセルされてしまった。それ以降も、思い出したように検索し、昨年七月、今度はヤフオクに出品されているのを見つけた。オークションだから、競り落とすまで気が気ではなかった。無事に競り落として、「その火を燃やしつづけて」を手にすることができた。本の扉を開くと、懐かしい斎先生のお顔がいくつも待ち構えていた。私の知っている斎先生、先輩たちの語る斎先生がそこにいた。自分一人で楽しんでいるのはもったいないと思い、同窓会報に寄稿された斎先生の文章6篇を同窓会ホームページに掲げた。（https://www.yagumokai.org/kaiho/index.html）

同窓会報に寄稿されたものだから、著作権云々を問題にされる方はいらっしゃらないだろう。都立大附属の状況を卒業生に伝え、卒業してもまだ教え子たちという暖かい心持を感じる。

そして、斎先生の足跡を辿ると、退職された後も学究の徒になろうと、自分のお孫さんの歳に当たる大学生らに混じって、生物実習に参加されていたことを知る。卒業してから知る斎先生、「その火を燃やしつづけて」は私の大切な宝物である。

「八雲が丘文庫」は、都立大学附属高等学校の閉校にあたり、当時の笹のぶえ副校長先生の提唱により開設された文庫です。寄贈された卒業生の著作を桜修館の生徒の閲覧に供しています。昨年寄贈本の受付を再開しました。寄贈の方法など詳しくは12面をご参照ください。

事務局インフォメーション

● 2020年度事業報告

２０２０年度は新型コロナ感染症の影響を受け、桜修館も我々同窓会もこれまでにない体験をすることになりました。桜修館は３月から５月末まで「休業」、夏休みの短縮やオンラインでの授業など厳しい学校運営を強いられました。修学旅行、研修旅行の中止や部活動の禁止など生徒にとっても大変だったと思います。

同窓会の活動はほとんどすべてができなくなりました。第72回記念祭が中止となったため、同窓会ルーム「八雲が丘の集い」の出展がなくなりました。第６回「八雲が丘ホームカミングデー」は感染症の蔓延状況と会場のめぐろパーシモンホールの感染対策の厳しさにより、中止を余儀なくされました。また八雲が丘学友会の会合は、昨年２月15日の第40回のあと開催を中止し、ようやく本年２月13日にZoomによるリモート会議を行ったのみでした。昨年、第８回目となるはずだった「八雲が丘賞」は、学校生活の不自由さを反映して優秀な活動を特定するのが難しく、授賞を見送りました。

唯一同窓会報は、例年通り６月30日にＡ４版・12ページで発行しました。印刷部数は9,000部。国内会員8,143部、海外在住会員96部、特別会員(恩師)155部、計8,394部を発送しました。他に桜修館教職員・生徒・PTA役員に200部を配布しました。

昨年10月に寄贈本の受付を再開した「八雲が丘文庫」は、学校への出入りに制約があるため十分に軌道に乗ったとは言えませんが、12面に掲載の要領に従ってぜひご協力ください。

● 2020年度決算報告

２０２０年度の決算は、34万円余りの黒字となりました。昨年度の２６万円弱の赤字から60万円ほど改善されたことになります。主な要因は、ホームカミングデー関連経費、記念祭関連経費がゼロだったことです。

前年度は、ホームカミングデー費と記念祭費の合計が４１万円ほどあり、同窓会の収支構造が赤字体質から完全に脱却したとは言えませんが、着実な会費納入増により収支均衡に近づきつつあります。

経常費用の大半を同窓会報の制作・発送費が占めていることに変わりはありません。次に大きな「支払い手数料」は、会費の収納代行に伴う手数料です。

◆ 2020年度中の会議ほか

2020年	5月14日	2019年度会計監査
	7月10日	上期「理事・監事・評議員会議」メール審議
2021年	1月31日	下期「理事・監事・評議員会議」メール審議
	2月13日	八雲が丘学友会(Zoom会議)
	2月28日	追加「理事・監事・評議員会議」(Zoom会議)

【表I】2020年度貸借対照表(財産目録)
2021年3月31日現在

科目・摘要	金額(単位:円)
1、資産の部	
現金及び預金	
現金	-
みずほ銀行普通預金	884,278
みずほ銀行定期預金	5,006,592
ゆうちょ銀行当座預金	3,468,892
ジャパンネット銀行普通預金	2,129,872
現金及び預金 計	11,489,634
資 産 計	11,489,634
2、負債の部	
未払金(理事長立替未払金)	21,303
負 債 計	21,303
3、正味財産の部	
前期繰越正味財産	11,121,555
当期正味財産増減額	346,877
正味財産計	11,468,432
負債・正味財産計	11,489,735

【表II】2020年度正味財産増減計算書
2020年4月1日～2021年3月31日

科目・摘要	金額(単位:円)
I、経常収益	
1、受取会費	2,560,000
2、寄附金	31,000
2、DVD等販売収入	-
2、利息収益	516
経常収益計	2,591,516
II、経常費用	
1、会報費	
会報原稿作成費	118,800
会報印刷製本料	812,015
会報通信運搬費	989,732
会報費計	1,920,547
2、ホームカミングデー費	
懇親会費収入	-
懇親会費支出	-
案内送付先作成送付費用	-
会場等賃借料	-
HCD雑費	-
ホームカミングデー費計	-
3、記念祭費	
通信運搬費	-
表彰金	-
記念祭雑費	-
記念祭費計	-
4、経常管理費	
旅費交通費	-
通信運搬費	43,803
支払手数料	256,729
会議費交際費	-
消耗品費	13,560
雑費	10,000
経常管理費計	324,092
経常費用計	2,244,639
当期正味財産増減額(経常損益)	346,877

<監査報告>

財務諸表、帳簿、証憑等を精査し、上記決算書に誤りがないことを確認します。

2021年5月12日

監事　簑原利憲

◆ 2021年度役員

理事長・会報編集担当　宍戸　迪武(13期)
常務理事・事業担当　佐々木浩二(15期)
常務理事・音楽催事担当　佐藤　文行(17期)
常務理事・ホームページ担当　嶋津　和行(26期)
常務理事・名簿管理担当　石川　恵子(35期)
常務理事・会計担当　田中　聡美(43期)
監事　簑原　利憲(11期)

事務局インフォメーション

年会費 2000円 納入のお願い

同窓会活動をより充実させるため、今年も会員の皆さんのご協力をお願いいたします。今回納入をお願いするのは２０２１年度の会費 2,000円です。

㊟３年会費 5,000円と終身会費は廃止されています。
３年以上前の払込取扱票は使用しないでください。

次の方は、納入していただく必要はございません。
①特別会員の先生方
②かつて終身会費 30,000円を納入された方
①②の方には会費払込取扱票が同封されていません。万一同封されていたら何らかの間違いですので、事務局までご連絡いただければ幸いです。

＜会費納入の方法＞

● **ゆうちょ銀行、コンビニ**
同封の払込取扱票をお使いください。

● **銀行振り込み**
ジャパンネット銀行　すずめ支店（支店番号００２）
普通預金　６２７１３９８
（口座名義）　トウキョウトリツダイガクフゾク
コウトウガッコウドウソウカイ

ATMから振り込む場合およびネットバンキングご利用の場合は、振り込み人の名前を修正して、名前の前に「卒業期・クラス」を入れてください。　（例＝１３Ａトリツタロウ）

同窓会への連絡方法

住所の変更、訃報、その他の同窓会への連絡は下記のいずれかの方法でお願いします。

● **インターネット**
同窓会のホームページを開き右下の「Contact us」ボタンをクリックするとメールフォームが出ます。

● **郵送**
〒152-0023　東京都目黒区八雲１－１－２
都立桜修館中等教育学校内
都立大学附属高等学校同窓会
または
〒152-0002　東京都目黒区目黒本町４－２３－６
宍戸方　都立大学附属高等学校同窓会事務局

訃報　謹んでお悔やみ申し上げます

国語	小野 牧夫先生		（不明）
理科・化学	藤島 広信先生		2020年6月19日
期・組		旧姓	
2B	大越　裕夫		2016年11月22日
2B	伊藤恵美子	武田	2019年8月
2C	飯野　　暁		2019年8月30日
2C	濱地　康剛		2019年11月
2C	武藤　三郎		2018年1月4日
3A	桜井真知子	向	2020年9月22日
3C	福山　弘雄		2019年11月15日
6A	伊藤　敬輔		2019年7月21日
6B	村上　京子	武	2019年3月19日
7C	西堀富士夫		2019年7月28日
8A	工藤　幹夫		2019年8月22日
8B	須田　大春		2020年10月7日
8C	井上　忠久		2020年3月6日
8C	長谷川恵男		2020年1月25日
9A	上利泰一郎		2020年9月3日
9A	西田　文子	水野	2020年8月2日
13D	渡辺　　信		2018年
14B	秋葉美根子	牧	2020年1月15日
16A	景山　恒郎		2019年11月
16B	新妻　胤和		2018年7月14日
16F	栗山アキ子	岩崎	2019年7月31日
18C	立川志津枝		2019年
22F	片山　　隆		2020年11月11日
24F	山村　睦子	船木	2020年3月15日
28B	林　　圭一		2017年2月27日

同窓会事務局に連絡のあった方のみ掲載しています

「八雲が丘文庫」への著書の寄贈

「八雲が丘文庫」への寄贈は以下のようにお願いします
寄贈を受ける著作は書籍のみといたします
卒業生ご本人の著作に限ります
収容能力から、寄贈は１冊ずつ２種類まで
寄贈本は下記までお送りください
〒152-0023 東京都目黒区八雲1-1-2
桜修館中等教育学校内 「八雲が丘文庫」担当

編集後記

会報は、一年間の同窓会活動を報告する役割を担っているわけですが、昨年はホームカミングデーをはじめほぼすべての行事が中止となり、今年の会報は会員からの寄稿が中心となりました。いかがでしょうか。

桜修館の鳥屋尾史郎校長先生が、3月末で小石川中等教育学校長に転出されました。3年間大変お世話になり厚く御礼申し上げます。新校長の石崎規生先生には、「桜修館同窓会ともども、どうぞよろしく」と申し上げます。

長年にわたり常務理事・会報編集委員長として同窓会活動の中心的存在だった須田大春氏（8期）が昨年10月に亡くなりました。ご冥福をお祈りします。

今年の記念祭は、9月11日（土）、12日（日）に開催されます。詳細は同窓会ホームページ、桜修館ホームページでご確認ください。

来年の同窓会報発行予定は、今年と同じく6月30日です。原稿締切りは4月末、奮って原稿をお寄せください。

同窓会報編集委員会

同窓会報編集委員会
13期　宍戸　迪武　26期　嶋津　和行
14期　川田　秀文　35期　石川　恵子
21期　根岸　之矢　43期　田中　聡美

● お詫びと訂正
昨年の会報8ページの本文中、先輩の氏名に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。
《8ページ最下段5行目～7行目》
皆川達男 → 正しくは 皆川達夫さん
三好 晃 → 正しくは 三善 晃さん